

「胃内視鏡治療—Strip biopsy の実際」

山口大学助教授・第1内科 多田 正弘 著

大阪鉄道病院院長

川 井 啓 市

多田正弘博士の力作の1つであろう「胃内視鏡治療—Strip biopsy の実際」の書評を引き受けることとなり、通読させていただいた。

多田先生は竹本忠良名誉教授、沖田極教授の紹介を待つまでもなく、日本の消化器内視鏡の分野での逸材であり、広く消化器内視鏡の領域で、日本を代表する研究者の1人である。学会ではその発表を聞くことはあっても個人的にお話できるチャンスはあまりなかったが、3年ほど前であろうか、毎年1月に開催される私たちの小さなサロン風のシンポジウムに招待した折、3日ほど御一緒する機会に恵まれた。この会は消化器内視鏡の最先端の話題について討論するもので、日本で比較的良好に知られているDr. Classen, Dr. Sivak, Dr. Geenenに私が加わってオーガナイズしている。毎年15人ほどの固定メンバーに10人ほどのニューメンバーが討論に参加するが、発表後、約30分の討論に耐えねばならない。フロリダのオーランドで開かれ、発表のpriorityを尊重してproceedingを印刷することはない。しかし今では欧米の若い先生方にとって1つの登龍門と受けとめられていると聞く。

多田先生の発表はこの書の主題と一緒だったように記憶するが、1例1例を大切にしながら早期胃癌の治療を生き生きと発表し、また物おじしない熱弁を思い出す。

ところで本書は、早期胃癌の内視鏡治療のために著者が確立した手技の紹介とともにその歴史的展開に詳しい。元来strip biopsyは竹本教授のjumbo biopsyに始まり、意識的に鉗子によって幽門輪から噴門までの組織を紐状にとろうとしたもので、初めの目的は広範な面としての正確な胃炎の組織診断にあった。ほぼ同じ時期に私も東北大式の吸引生検を応用して4cmの紐状の生検

材料を得た経験をし小論文で触れたことがあるが、いずれにしろ多田博士の努力は胃炎の診断を越えたことにある。すなわち早期胃癌の面としての組織診断を治療にまで広げたことに意義があり、Ottenjannのbig particle biopsyやsnare biopsyの手技を越えたことにある。

もちろん、この手技の確立は多くの周辺技術の開発、すなわち、注射針の工夫に始まり、把持鉗子や高周波焼灼、止血のためのクリップの開発などがあって初めて可能になったもので、strip biopsyの手技の開発の苦労が最も生き生きと書かれている。また、このような早期胃癌の治療への展開をいっそう重みのある臨床研究としたのは、その後の経過観察にあり、再発を指標として地道に追跡していることにある。

しかし何と言っても多田博士の成果は、ある意味で時代の好運に恵まれたこともある。なぜなら、このような早期胃癌の診断学は病理学、X線、内視鏡の多くの専門家が1960年代に確立した背景の上に成り立っているからである。その意味でstrip biopsyのpriorityを主張することはよく理解できるが、endoscopic mucosal resection (EMR)が既に欧米でも定着してきている現状を無視することもできない。

strip biopsyの持つ語感には、あくまで生検診断にあり治療的な意義は含まれにくいからであり、英語は残念ながら私たちにあって母国語でなく、学術用語はいかに多くの人が共通の理解で繁用してゆくかが問題だからである。

ここで思い出すのは日本で完成されたendoscopic pancreato-cholangiography (EPCG)が欧米の反対によってendoscopic retrograde cholangio-pancreatography (ERCP)に変わった無念さに共通するものがあるかもしれない。

他方、書評からは少しずれるが、私には早期胃癌の治療を通じて夢がある。それは故・村上忠重教授が「早期胃癌診断学講座」(文光堂)で書かれたことであるが、早期胃癌の診断学の確立された現在、これから何十年かたてば、進行胃癌は大学の標本室でしかみられず、臨床では早期胃癌のみみられるだろうとの予言である。このことは私たちの1万人といった閉鎖集団の追跡で確かに証明でき、この集団では新しく発見された胃癌は理論的に癌発生率とほぼ一致する資料を得、先生の仮説の証明のみでなく、日本人の早期胃癌が日本人にとって特異なものでなく、あくまで進行癌の早期のものであるという結論ともなったことに一脈相通じるものである。

私の多田博士に対する今後の期待は、内視鏡治療の適応をリンパ節転移のない条件としてのUI(-), 2cm以内のIICまたはIIaの癌とする適応は同感するが、それのみでは胃癌の20%を対象とすることとなる。この手技の適応をいっそう広げて、QOLを加味した再発率の取り扱いで、その適応をいっそうbreak throughすることができないかという問題解決が残ろうし、informed consentも含め新しい局面の拡がりを期待する。

何はともあれ、本書は多田博士が入局早々に与えられた主題を、その若さでどのように苦勞しながらもめることができたか、若い内視鏡医には必読の書として推薦する。臨床の研究はまず十分の数と観察の期間が要求されるが、日本の若い力の集まりの中で成果を上げて英文で改めて上梓されることを期待する。

●B5 頁162 図38 写真29
カラー写真320 1998 定価(本体
15,000円+税) 円400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)